

# ユニークなミゼリコルディア ：エツメリヒ、聖マルティニ聖堂の内陣席装飾について<sup>1</sup>

元 木 幸 一

(山形大学名誉教授)

## はじめに

スイスからオランダに向かって流れる大河ラインでドイツ最後の港町はエツメリヒ (Emmerich) である。現在では人口3万ほどの小都市だが、500年程前の1520年11月16日、かのアルブレヒト・デューラーが三度目のアントウェルペン行きの上で一泊した町である。彼の『ネーデルラント旅日記』にはその町の名称だけでなく、その町で何をしたかという具体的な行動が逐一記述されている。

「エツメリヒでは逗留して立派な食事に3ヴァイスペニツヒを使った。そしてそこで金細工師の徒弟でアントウェルペン出身のペーター・フェーダーマッヒャーの肖像を描き、ただ一点の婦人像を描いた。この逗留の原因は何とも激しい嵐が我々を襲ったからに外ならない。私はさらに5ヴァイスペニツヒを使い、支払いのため1グルデンをくずした。また私は宿屋の主人の肖像を描いた。」<sup>2</sup>

驚いたことに、デューラーはこの小さな町でのわずか一泊で金細工師の徒弟、正体不明の婦人、宿屋の主人、計三点の肖像を描いたというのである。素描ということだろうか。また、徒弟に過ぎない「ペーター・フェーダーマッヒャー」の名をわざわざ記録しているにもかかわらず、婦人や宿屋主人の名を無視しているのも不思議である。金

細工師という同じ職人ゆえの親近感からか、あるいは父と同業者であるがゆえであろうか。



(fig.1) エツメリヒ聖マルティニ聖堂、左がライン川

さて、今でもエツメリヒのライン川沿いには船着場があり、多数のコンテナを積んだ貨物船や大きな観光船が往来している。船着場付近には近代的なホテルやマンション、観光案内所が立ち並び、様々な意味でライン川がこの町の中心であることを示している。

河畔のホテル群に沿ってしばらく下流、オランダの方へ歩くと、さほど大きくもない聖堂が立ち現れる (fig. 1)。聖マルティニ聖堂である。この聖堂の中には、極めて興味深いミゼリコルディア (聖職者席下部木彫) が残されているのだ。

19世紀末の美術史家パウル・クレメンは、この聖堂の内陣席 (聖職者席) を次のように記述している。

「エツメリヒの内陣席はニーダーライン地方のこの種の造形品の中でもっとも豪華で、もっとも大規模なものである。それらはクサンテンの内陣席ほど壮大な効果をもたらすはしないし、クレー

<sup>1</sup> 小論は、科学研究費補助金 基盤研究 (C) (研究課題「尻の下のイメージ：ドイツにおける聖職者席下部彫刻ミゼリコルディアの総合的研究」課題番号18K00182) 研究成果の一部である。

<sup>2</sup> デューラー『ネーデルラント旅日記』前川誠郎訳、岩波文庫、2007年、106-107頁。前川氏は「エツメリヒ」と記している。H. Rupprich (Hrsg.), *Dürer Schriftlicher Nachlass*, Berlin, 1956, p. 161.

ヴェの内陣席ほど人物像の完成度において繊細ではない。しかしながら、それは動物像の機知に富む多様な表現において、また装飾美において、これら二つの町の聖堂を凌駕するのである。<sup>3</sup>

つまり、この聖堂の内陣席はケルン、デュッセルドルフ、デュースブルクなどの大都市が並ぶ低ライン地方（ニーダーライン地方）の中でも際立った教会内部装飾家具であると言える。本論ではライン川という大河に面した聖堂に現存するこの内陣席がどのようにして作られたか、このミゼリコルディア（misericordia）の特徴はどこにあるのか等を分析したいと思う。それをもってドイツ語圏のミゼリコルディアを総合的に調査し、各地域、各聖堂の特徴を分析する研究の一部としたい。

## 第1章 聖マルティニ聖堂の歴史と内陣席の寄進者<sup>4</sup>

伝説によれば、聖ヴィリプロルトが700年にエッメリヒの最も古い教会を聖マルティヌスに捧げたという。最古の記録では、エッメリヒには914年までに聖堂参事会または修道院が成立していたとされる<sup>5</sup>。この聖堂の新しい起工が明白なのは1040年頃で、ユトレヒト司教ベルノルト（Bernold 司教位1027-1054年）の計画に基づくものだった。彼は司教区内にいくつかの教会建築を企画し、そこにはユトレヒトの聖ピーテル聖堂、聖ヤン聖堂、デーフェンターの聖レバイヌス聖堂、そしてエッメリヒの聖マルティニ聖堂が含まれていた。ユトレヒト聖ピーテル聖堂の献堂式が1048年だったこ

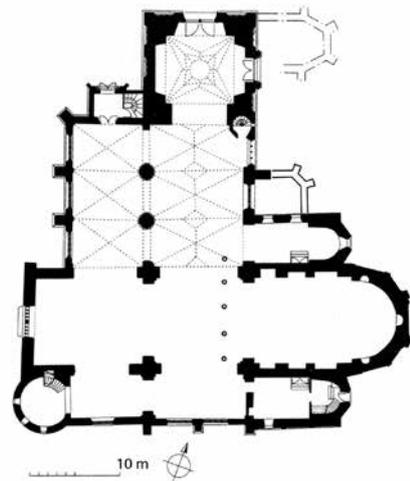
<sup>3</sup> Paul Clemen, *Die Kunstdenkmäler des Kreis Rees*, Düsseldorf, 1892; *Emmerich St. Martini*, Regensburg, 2010, p.22.

<sup>4</sup> エッメリヒ聖マルティニ聖堂の歴史などについては以下を参照した。Ulrike Spengler-Reffgen, *Das Stift St. Martini zu Emmerich von den Anfängen bis zur Mitte des 15. Jahrhunderts*, Siegburg, 1997; Georg Dehio, *Handbuch der deutschen Kunstdenkmäler, Nordrhein-Westfalen I Rheinland*, Berlin, 2005, pp. 345-349; *Emmerich St. Martini*, op. cit.; H. W. J. Piron, "The Choir Stalls of St Martin in Emmerich: History of a Battered Ensemble," *Monuments & Memory. Christian Cult Buildings and Constructions of the Past. Essays in Honour of Sible de Blaauw*, Turnhout, 2016, pp. 297-306.

<sup>5</sup> H.W.J. Piron, op. cit., p. 297.

とからすれば、聖マルティニ聖堂も同じ頃に建設されたものと思われる。

その聖マルティニ聖堂の平面図は主内陣、身廊、翼廊からなる十字形をなしており－現状は内陣から西構えの東西ラインに、身廊部と一廊式側廊の南北ラインが直交するという変型になっている（fig. 2）－、身廊両側には各一廊の側廊があり、主内陣の両側には脇内陣が付属していた。身廊は二つの塔のある西構えで閉じられた。主内陣は外面では五面形、内面では円形になっていた。この五面形式はラヴェンナに倣ったもので、アルプス以北ではおそらく初めて実施されたと思われる。そのことは司教ベルノルトと皇帝コンラート2世の密接な関係に由来し、皇帝の権力を象徴したものと推測されている。



(fig.2) 聖マルティニ聖堂平面図

その聖マルティニ聖堂は、1237-1238年にかけて、ライン川の氾濫で身廊部や聖堂西区画が押し流され、多大な損害を被った。ベルノルトが建設した部分で残ったのは、クリュプタ、内陣、交差部、東端ベイだけだった。

その後聖マルティニ聖堂は1485年頃にゴシック様式で改築された。現在の内陣席、ミゼリコルディアに関係するのはこの改築である。この時の寄進者は、エッメリヒの首席司祭モーリッツ・フォン・シュピーゲルベルク（Moritz von Spiegelberg）

だった。聖マルティニ聖堂の『各年帳簿（Calendarium anniversariorum）』には次のような記載がある。

「主の年1483年に、尊く高名な君主シュピーゲルベルク伯モーリッツは没した。彼はケルン大聖堂の司祭にして参事会員，エツメリヒの首席司祭，ユトレヒト司教座聖堂の助祭だった。その生涯において、彼は新しい見事な座席を寄進した。」<sup>6</sup>

つまり内陣改築を主導し、われわれが探究の対象とする内陣席を新たに寄進したのがモーリッツだった。彼はエツメリヒの首席司祭だけでなく、ケルン大聖堂司祭，参事会員も務め、エツメリヒが属していたユトレヒト大聖堂の助祭でもあったのである。

この人物は1406-07年に、ヒルデスハイム司教の配下だったシュピーゲルベルク伯の子として誕生した。その領地はハーメルンとヒルデスハイムの間に位置していた。1418年に父は、カロリング朝西構え唯一の現存物であるコルヴァイ修道院の世俗院長となった。モーリッツ自身は1427年にライプツィヒ大学に登録されている。1434年に父が戦没したのでコルヴァイ修道院長の地位を失ったが、1435年モーリッツはケルン大聖堂参事会員席を獲得した。このケルン大聖堂参事会員はドイツでもっとも特権的な地位の一つといえよう。同年、彼はバーゼル市参事会員にもなっている。1443年には、ユトレヒト大聖堂参事会員となった。さらに翌1444年にはエツメリヒの聖マルティニ聖堂参事会員となり、その後エツメリヒの修道院長の地位をも獲得した。またトリアー大聖堂参事会員、マーストリヒトでの参事会員などの地位にも就いた。このように数多くの都市や聖堂の役職についていたにもかかわらず、彼はほとんどケルンで暮らしていた。彼がエツメリヒに滞在するようになったのは1458年以降で、1474年にケルンでの政争に敗れて市外追放になってからの2年間はエツメリヒで亡命生活を送った。そして彼は1483年6月3日ケルンで他界し、その遺志に従って、ケル

ン大聖堂聖アントニウス祭壇の前に埋葬された。そして死の直前に彼はかつて亡命生活を送ったエツメリヒの聖マルティニ聖堂のために、内陣席を注文したのである。その銘に従えば、没後3年で完成した<sup>7</sup>。

モーリッツ・フォン・シュピーゲルベルクは大学で学び、書物を愛する教養人で、「新しき信心（Devotio Moderna）」のような当時流行した潮流へも興味を持っていたらしい。ケルンのヴィンデスハイム修道院に聖務日課書を注文したことも知られている。さらにオウィディウス、キケロ、ボッカチオの著作を所有するなど、人文主義へも関心を示し、北ネーデルラントの著名な人文主義者ルドルフス・アグリコラの知人でもあった。彼はエツメリヒの古い参事会学校をラテン語学校に変えるなど典型的な教養人だったのである。

なお、1735年頃にオランダの素描家ヤン・デ・バイエルが描いた教会内部の絵（fig. 3）が残されている。それは北から身廊に沿って南方向を描いたもので、左奥には内陣仕切りが見える。現在では失われた内陣仕切りだが、おそらく1480-90年頃に建造され、19世紀に破壊されたものだろうと思われる。内陣仕切りの柱土台は現存している。

ちなみに、現在の聖堂で、凝灰岩を建材としているのはもともとロマネスク様式だった部分で、



(fig.3) ヤン・デ・バイエル 《エツメリヒ聖マルティニ聖堂内部》1735年頃

<sup>6</sup> Ibid., p.298.

<sup>7</sup> Idem.

レンガ建箇所はゴシック様式だった部分ということになる。

本聖堂が最大の被害を受けたのは、1944年10月7日第二次大戦での焼夷弾攻撃である。内陣席の南半分が焼失してしまったのはこの時である。北側内陣席は残ったが、部分的に損害を受けた箇所は1973-1977年の間にカルカーの指物師やクレヴェの彫刻家の手で修復され、現在では南壁沿いに設置されている。全体の修復・再建が終了し、新しい儀式用祭壇が設置されて奉献式が施行されたのは、1989年9月だった。

## 第2章 内陣席概観<sup>8</sup>

現在の聖マルティニ聖堂への入り口は、北塔の東側にある。堂内に入ると後期ゴシックの星型ヴォールトの新しい身廊が南に向かって3ベイ進み、正面に方形の祭壇が現れる。その向こうに元来は北側に設置されていた内陣席が南壁に接しておかれている。全部で18席の内陣席だが、当初は南北それぞれ18席ずつの内陣席があった。つまり内陣席の合計は36席あったということになる。

現存する内陣席は二段になっており、下段には8席、上段には10席が取り付けられている（fig.4）。規模は上段が長さ793センチ、高さ310センチ、1席あたりの座席幅51センチ、下段は長さ680センチ、高さ152センチ、座席幅53センチである。下段中央には上段に上がる階段への扉があり、左右両端には扉なしで階段が設置されている。

左側の側板（フランス語で *jouée*、ドイツ語で *Wangen*<sup>9</sup>）上部には1486という年号が彫られている。1483年に遺言によって依頼した内陣席が3年で完成し、設置されたのである。上段の背板には



(fig.4) エッセリヒ聖マルティニ聖堂内陣席

中央に野人像、左側にはザクセン家をはじめとする母方の紋章、右側には父方の紋章がフォン・シュピーゲルベルク家まで合計9枚並んでいる。左端の一枚には紋章がなくトレーサリーのみが彫られている。これら紋章によって寄進者としてのフォン・シュピーゲルベルク家が強調され、その由緒正しさが示される。つまりこれら紋章は家門証明なのである。

下段側板の外側には南北で聖アウグスティヌス、聖アムブロシウス、聖ヒエロニムス、聖グレゴリウスという四大教父のレリーフがあったと思われるが、現存するのは聖グレゴリウスと聖アウグスティヌスのみである。

## 第3章 小座板の型式

ベネディクト会の規則では、聖職者は七つの時禱からなる聖務日課の間は立っていなければならなかった<sup>10</sup>。当初、内陣で祈りを捧げる老人や身障者の聖職者などは松葉杖を頼りにしていたが、12世紀末頃になると、立てた座板裏の突起台（ledge）に臀部を載せることが許されるようになった<sup>11</sup>。その突起台と装飾付きの支持部を合わせてミゼリコルディアと呼ばれることになる。そ

<sup>8</sup> 聖マルティニ聖堂の内陣席に関しては以下を参照した。E.C. Block, *Misericords in the Rhineland Images of Medieval Life*, Paris-New York, 1996, pp. 101-110.

また、内陣席一般の多様な部分の意味付け、形式的特徴などは以下のブロック著書の序論が参考になる。E. C. Block, *Corpus of Medieval Misericords in France XIII-XVI Century*, Turnhout, 2003.

<sup>9</sup> 英語には一語でそれに相当する言葉はない。フランス語 *jouée* もドイツ語 *Wangen* もともに「頬」という意味である。ブロックはあえて英語で *End Panels* と呼んでいる。

<sup>10</sup> "Misericord", *The Dictionary of Art*, vol. 21, Grove, 1996, pp. 724-725.

<sup>11</sup> ベネディクトゥスの『戒律』には、老人などへの「優しい配慮」をするよう記されている。ヌルシアのベネディクトゥス「戒律」『中世思想原典集成5後期ラテン教父』古田暁訳、平凡社、1993年、240-328頁、殊に290頁。

の突起台を、蝶番等で開閉可能な通常腰掛ける大きな座板と区別するために、ここでは「小座板」と呼ぶことにしよう。

ちなみにミゼリコルディアの材料は通常オーク材である。硬くて丈夫であり、細工も比較的容易だからである<sup>12</sup>。ちなみに、中世のミゼリコルディアにはほとんど亀裂が見られないのだが、それは以下の理由によると考えられる。第一に中世の工房や教会には暖房がなかったので、湿度はある程度良い状態に保たれていた。第二に材木は木目に従って四分割されていた。第三に材木は使用されるまで十分に乾燥されていた<sup>13</sup>。

この小座板の形式は多様である。例えば、台形、長方形、半月形、浅い半月形、帆立貝形、U字形などがあるが、エッセリヒの小座板型式は「二葉形 (bilobate)」である<sup>14</sup>。

二枚の丸い葉が合体したような形なので「二葉形」と呼ばれる (fig.5)。エッセリヒのミゼリコルディアではその葉の下を各々一つずつの円錐形の持ち送り (console) が支えている。その円錐形には横に二筋の線が入っている。また二本の円錐形は接触せずに隙間がある。そして、持ち送りを飾るように動物や人物像、あるいは葉飾りなど諸モチーフのミゼリコルディア彫刻が付着しているのである。

この二葉形小座板が見られるのは、他にクレヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂 (1474年)、カルカー、聖ニコライ聖堂 (1505-08年)<sup>15</sup>、クサ

ンテン、聖ヴィクトル聖堂 (1450年頃) (fig.6)<sup>16</sup>、シュトゥラーレン、教区聖堂 (15世紀)、ケムペン、聖母聖堂 (1493年) など<sup>17</sup>で、これらの聖堂はすべて低ライン地方にあり、いずれも15世紀後半から16世紀初頭の制作である。最古はクサンテン、聖ヴィクトル聖堂で1450年頃と推測される。これらの中で年記がある最古のミゼリコルディアはクレヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂で、側板に1474と年記がある。



(fig.5) ミゼリコルディア「一本の骨を取り合う2匹の犬」



(fig.6) クサンテン聖ヴィクトル聖堂ミゼリコルディア「鷲」

他に多葉形の小座板ミゼリコルディアは、ブロックの調査によれば、ポルトガル<sup>18</sup>とフランス<sup>19</sup>に各1例、スペインに4例<sup>20</sup>が見られるばかりだが、スペインの2例は三葉形であり (fig.7)、他の二葉形 (fig.8) には円錐形の持ち送りはなく、低ライン地方の二葉形ミゼリコルディアとはその点で異なる。

ところが北ネーデルラントのエトレヒト、聖ヤン聖堂内陣席の小座板は、低ライン地方とよく似た二葉形で円錐形の持ち送りを持つ同タイプのミ

<sup>12</sup> H.Harrison, "Technical Aspects of the Misericord," *Profane Images in Marginal Arts of the Middle Ages*, (ed. E. C. Block), Turnhout, 2009, p. XX.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p.XXII.

<sup>14</sup> 「二葉形」ミゼリコルディアについては以下を参照。W. Piron, "The Bilobate Misericords of the Lower Rhine Area: A Local Phenomenon?," *Choir Stalls and their Workshops* (eds. A. Seliger and W. Piron), Newcastle upon Tyne, 2017, pp.282-298.

<sup>15</sup> 聖ニコライ聖堂については以下を参照。田辺幹之助「聖堂内装としての木彫について-カルカー、ザンクト・ニコライ聖堂を例として-」『聖なるかたち 後期ゴシックの木彫と板絵』国立西洋美術館, 1994年, 181-192頁。

<sup>16</sup> クサンテン、聖ヴィクトル聖堂には時代の異なる二種のミゼリコルディアがあり、一つは1450年頃のもので6席だが、もう一つの大規模な54席のミゼリコルディアは年輪年代測定法によると1228年頃のものである。W. Piron, *op. cit.*, pp. 284-285.

<sup>17</sup> 他にマリエンバウムの巡礼聖堂、デュッセルドルフの聖ラムベルティ聖堂にも見られる。Piron, *op. cit.*, pp.284-286, 295.

<sup>18</sup> ポルトガルには、コインブラに三葉形のミゼリコルディアがある。E. C. Block, *Corpus of Medieval Misericords Iberia*, Turnhout, 2004, pp.104-109.

<sup>19</sup> Block, *Corpus France*, p.256.

<sup>20</sup> スペインは、オビエド大聖堂、バリャドリッド、コレヒオ・デ・サン・グレゴリオ（現在はベルリン）の二つが二葉形、トレド大聖堂、プラセンシア大聖堂の二つが三葉形。Block, *Corpus Iberia*, pp. 120, 189-191, 228-235.



(fig.7) スペイン、プラセンシア大聖堂ミゼリコルディア「騎乗する道化を案内する猿」



(fig.8) スペイン、オビエド大聖堂ミゼリコルディア「晚餐にコウノトリを招待する狐」

ゼリコルディア (fig.9) なのである<sup>21</sup>。二つの円錐形は接している点でエッセリヒとやや異なるが、横に二重の筋が入っている点では同じである。その点や2本の横筋の幅や間隔などで、もっとも類似しているのは、クレーヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂 (fig.10) とケムペン、聖母聖堂のミゼリコルディアであろう<sup>22</sup>。



(fig.9) ユトレヒト聖ヤン聖堂ミゼリコルディア「海で狩をする狐」



(fig.10) クレーヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂ミゼリコルディア「籠の中の男」

エッセリヒはかつてユトレヒト司教区に属しており、この低ライン地方とユトレヒトとは古くから宗教的に密接な関係を有していた。そこから推察すると、これらの二葉形ミゼリコルディアは同一工房か、きわめて近い関係にある工房によって制作されたものと考えられる。さらにヤン・フェルスパーンドクによれば、低ライン地方は古くからユトレヒト司教区に含まれていたこと、さら

にエッセリヒは中でも古い参事会で、司教選挙で投票権を持つほどに有力な聖堂参事会だったことなどから考えると、エッセリヒ内陣席の依頼主であるモーリッツ・フォン・シュピーゲルベルクがこれらのミゼリコルディアの類似性に大きな影響力を発揮したという。彼は、1480年頃にはエッセリヒ、聖マルティニ聖堂参事会の首席司祭であり、ユトレヒト大聖堂参事会員でもあったのである<sup>23</sup>。

そうしてみると、エッセリヒ、聖マルティニ聖堂の二葉形ミゼリコルディアは、低ライン地方で15世紀後半から16世紀初頭に流行した形式であり、それを制作した工房あるいは繋がりがあった工房が依頼主との関係からユトレヒト、聖ヤン聖堂でも参加したと考えられよう。

これらの聖堂を具体的な作者名と結びつけてみよう。この二葉形ミゼリコルディアで最も古い1474の年記のあるクレーヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂の内陣席作者は彫刻家アルント (Arnt Beeldsnider)<sup>24</sup>である。彼は、その後1476-77年にクサンテンで《救世主像》や《受難具をもつ天使像》を制作、カルカー、聖ニコライ聖堂で《聖ゲオルク祭壇》(1484年)《埋葬》(1487年)を、最後に同聖堂の主祭壇を作り始め、未完成で他界した。さらにケムペン、聖母聖堂内陣席は、1493年にヨハネス・グルーター (Johannes Gruter) の手で制作された<sup>25</sup>。このグルーターはヴェセル出身のヘンリク・ベルント (父) の徒弟だった。そして1508年頃カルカーの聖ニコライ聖堂の内陣席を担当したのが、その息子ヘンリク・ベルント (子) だった<sup>26</sup>。

<sup>23</sup> Jan Verspaandonk, "De koorbanken van de Janskerk," *Maandblad Oud-Utrecht*, vol. 57, 1984, pp. 26-27.

<sup>24</sup> W. Piron, *op. cit.*, p. 285; H. Meurer, "Arnt, Master," *The Dictionary of Art*, vol. 2, J. Turner (ed.), Macmillan Pub., 1996, pp.486-487; S. T., "Arnt Beeldsnider," *Allgemeines Künstler-Lexikon*, Bd.5, München-Leipzig, 1992, pp. 254-255.

<sup>25</sup> W. Piron, *op. cit.*, pp. 285-286; E. Hintze, "Gruter, Johannes," *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler*, Bd. 15, Leipzig, 1922, p. 154.

<sup>26</sup> W. Piron, *op. cit.*, p. 286; B. S., "Bernts, Henrik," *Allgemeines Künstler-Lexikon*, Bd.9, München-Leipzig, 1994, p.626.

<sup>21</sup> E.C. Block, *Corpus of Medieval Misericords Belgium-Netherlands*, Turnhout, 2010, p. 217.

<sup>22</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, pp. 32-39, 127-135.

まとめるとアルントとヘンリク・ベルント（子）は、カルカー、聖ニコライ聖堂の制作活動で繋がりが、ベルント（父）とグルーターは師弟関係で結ばれていたのである。とするとグルーターとベルント（子）は、兄弟弟子だった可能性が高い。そして1486年に完成されたエッメリヒの内陣席は、時期的にアルントとグルーターやヘンリク・ベルント（子）の間に位置する。つまり、エッメリヒの内陣席を制作した親方は、この密接な関係を有するグループの一人、あるいはそれに深く関わった親方と推定できよう。

#### 第4章 ミゼリコルディアのテーマ — 諺、寓意、動物等 —

エッメリヒ、聖マルティニ聖堂の現存する18席のミゼリコルディアの内、「一本の骨を取り合う2匹の犬」「二つの椅子の間にしゃがむ男」「卵を殻竿で打ったって山のような殻が出るだけだ」「口に仔羊を啜る狐」の4つは諺に由来する。ここでは、この諺のほか、寓意、動物などのテーマについて分析しよう<sup>27</sup>。

##### (1) 「一本の骨を取り合う2匹の犬」(fig.11)

円錐形の付け根に2匹の犬が頭を接して一本の骨を啜え、引っ張り合っている。座板の裏面に後ろ足をしっかり踏ん張り、力を込めている<sup>28</sup>。ベルリン国立絵画館蔵、P.ブリューゲル（父）作《ネーデルラントの諺》にもその例がある（fig.12）<sup>29</sup>。中央やや右手、亜麻の髭をつける偽キリストの左手後方に、黒い犬と白い犬が一本の骨を噛み合っている。通常「嫉妬」を示唆されると言われる。ブリューゲルの表現は、このミゼリコル

ディアにかなり近いように見える。



(fig.11) ミゼリコルディア  
「一本の骨を取り合う2  
匹の犬」



(fig.12) P. ブリューゲル  
《ネーデルラントの諺》  
ベルリン国立絵画館、部分

ところが、このモチーフはミゼリコルディアだけでなく、同じ聖マルティニ聖堂内陣の左から3番目の側板頂部（fig.13）にも丸彫りで表されている。2匹の犬が腰を下ろして左前足を相手の右肩にあて、突っ張り、互いに口を大きく開けて骨を啜え、引っ張り合っている。丸彫りであることもあって、この表現はブリューゲルとはかなり相違している。

このテーマは低ライン地方では、ケムペン、聖母聖堂のミゼリコルディア（1493年）<sup>30</sup>、ネットスハイム、聖マルティン聖堂の側板頂部（15世紀）<sup>31</sup>、ネーデルラントでは、リムブルフ地方ネーデルヴェールト、聖ランベルトゥス聖堂（1500-30年頃）<sup>32</sup>、同地方ヴェンロ、聖マルティヌス聖堂のミゼリコルディア（1497-99年）<sup>33</sup>などにも見ることができる。

また他の地域でも、このモチーフは見られる。フランスでは、中南部オーヴェルニュ地方カンタルの聖セルナン聖堂（15世紀）（fig.14）<sup>34</sup>や東部メヌ・エ・ロワールのベユアール、ノートル・ダム聖堂<sup>35</sup>にあり、そこでは2匹の犬が頭を寄せ合って、一本の骨に噛み付こうとしている。カンタルの犬は、犬の種類や尻尾の形などでエッメリヒのそれによく似ている。ただ、右手の犬の頭部は欠

<sup>27</sup> ミゼリコルディアの諺テーマについては主に以下を参照した。E. C. Block, "Misericords and the World of Bruegel," *Profane Images in Marginal Art of the Middle Ages* (ed. E. C. Block), Turnhout, 2009, pp. 21-45; P. Hardwick, *English Medieval Misericords. The Margins of Meaning*, Woodbridge, 2011, pp. 11-65, 85-153; 森洋子『ブリューゲルの諺の世界 民衆文化を語る』白鳳社、1992年。

<sup>28</sup> *Emmerich St. Martini, op. cit.*, p. 23.

<sup>29</sup> 森洋子、前掲書、322-330頁。

<sup>30</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, p. 134, SU-03.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 150, NW-01.

<sup>32</sup> Block, *Corpus Belgium-the Netherlands*, p.47, N-03.

<sup>33</sup> *Ibid.*, p.49, N-11.

<sup>34</sup> Block, *Corpus France*, pp.33, 257, N-02.

<sup>35</sup> *Ibid.*, pp. 102, 336, E-01.

損しているのではっきりとは分からないのだが、この犬の頭は骨まで届いていないように思われる。一方でベユアールの同主題ミゼリコルディアでは共に毛並みのよい豊かな犬同士であり、エッセリヒのそれとは大分異なるのである。



(fig.13) 側板頂部「一本の骨を取り合う2匹の犬」



(fig.14) フランス、カントル聖セルナン聖堂ミゼリコルディア「一本の骨を取り合う2匹の犬」



(fig.15) スペイン、プラセンシア大聖堂ミゼリコルディア「一本の骨を取り合う2匹の犬」

スペインでも3例の同主題ミゼリコルディアが見られる。スペイン東部、カセレスのプラセンシア大聖堂（15～16世紀）(fig.15)<sup>36</sup>やサモラ大聖堂の2例（1502-05年）<sup>37</sup>である。プラセンシア大聖堂のミゼリコルディアはエッセリヒやフランスの例と異なり、2匹の犬のうち片方が頭を下げて骨を咥え、もう1匹は上体を起こし、骨を咥えている片方の犬を上から見下ろしている。珍しく、背景には木が4本立っている。サモラ大聖堂のミゼリコルディア（NB-09）では、2匹のスペイン犬が羊の頭部骸骨から伸びる角をなめている。これまでの例では1本の長いまっすぐの骨だったが、ここでは羊の骸骨で、しかも舐め合っている

<sup>36</sup> E. C. Block, *Corpus of Medieval Misericords Iberia Portugal-Spain XIII-XVI*, Turnhout, 2004, pp. 13, 120, SWB-01.

<sup>37</sup> *Ibid.*, pp. 53, 55, 241, 246, NB-09, NH-18.

のが、その角という稀有な表現となっている。さらにサモラのもう一つの例（NH-18）では、左右両脇から頭を伸ばして一本の骨を片方が噛み、もう片方が舐めている。その2匹の間に手前向きの人間の尻が見える。この聖堂のミゼリコルディアには他にも尻の表現が多数見える。作者あるいは依頼主の特別な嗜好なのかもしれない。

## (2) 「二つの椅子の間にしゃがむ男」(fig.16)

西側上段2つ目のミゼリコルディアは「二つの椅子の間にしゃがむ男」のモチーフである。真ん中に男が腰を下ろし、三脚椅子を左右に両手で持って支えにしている。男は三つボタンのジャケットを着、フードを被り、先の尖った靴を履いている。

このモチーフはブリューゲル《ネーデルラントの諺》（ベルリン国立絵画館）左手の民家地階、左手奥の闇の中に登場する（fig.17）。また初期の《十二のネーデルラントの諺》（アントウェルペン、マイヤー・ファン・デン・ベルフ美術館）の右上上段にも現れていた。これらは森洋子によれば、フランドルの諺「二つの椅子の間の灰の中に座る（落ちる）」を絵画化したものである<sup>38</sup>。つまり、左右どちらの椅子に座ったら良いか判断できず、ぐずぐずしているうちに灰の中に落ちてしまうという意味。端的に言えば、優柔不断を揶揄したモチーフである。日本風に言えば、「二兎を追う者は一兎をも得ず」ということになる。



(fig.16) ミゼリコルディア「二つの椅子の間にしゃがむ男」



(fig.17) P. ブリューゲル《ネーデルラントの諺》ベルリン国立絵画館、部分

<sup>38</sup> 森洋子, 前掲書, 191-203頁。

ブリューゲル作品と違い、ここでの男は腰を地面に下ろしてしまうのではなく、跪いている。また彫刻で表現することの困難さゆえにか、灰の表現は省略されている。さらに、ブリューゲルでは悲惨な表情であるのに対し、ここでは笑っているように見える。失敗そのものを表しているというより、ぐずぐずして決断できない愚かさを示しているようだ。

さてこの例は、ネーデルラントではフリースラントのボルスヴァルト聖マルティニ聖堂のミゼリコルディア（1480-99年）(fig.18)<sup>39</sup>で、帽子とロングコートを着た男が両手で椅子を支えにして中腰になる姿で表されている。二つの椅子の間で腰を降ろしているようなポーズではない。ブリューゲルの絵画における「二つの椅子の間の灰の中に座る」の表現とはやや異なるのである。二つの椅子のどちらに座ろうか、決めかねているという仕草である。決めかねたがゆえに、灰の中に落ちるという結果は示されていない。ここでは優柔不断がまだマイナスの結末を迎えはしない。ネーデルラントには他にアムステルダム、アウデケルク（聖ニコラウス聖堂）<sup>40</sup>にもある。



(fig.18) オランダ、ボルスヴァルト聖マルティニ聖堂ミゼリコルディア「二つの椅子の間にいる男」

フランスでも同じ諺がミゼリコルディアで表現される。ルーアン大聖堂（1457-70年）<sup>41</sup>では長

い外衣を着、ターバンを被った男が、両手を左右に伸ばして四角の椅子の上に載せており、両足は横に大きく開き、今にも腰を地に落としそうである。また、サン・マルタン・オー・ボワの旧オーギュスタン修道院（1492年）<sup>42</sup>にも見られる。

イベリア半島では、ポルトガル、コインブラ聖十字架聖堂（1513年）<sup>43</sup>のミゼリコルディアで、裸体の男が左右の三脚椅子を両脇に置き、跪いている。裸体男性という点で、これまでの例とは異なる。ただし、椅子の形や男の跪く姿勢は、エッセリヒに比較的似ている。さらにトレド大聖堂（15世紀後半）(fig.19)<sup>44</sup>では同様に跪く姿勢で左右の三脚椅子を抱えている。ただし、この場合は膝までのガウンのような衣装を身につけている。椅子の形、男の姿勢などの点で、このトレド大聖堂の例がこれまでの例の中でもっともエッセリヒに近いといえよう。さらにコインブラ、トレドのミゼリコルディアの小座板は三葉形であり、二葉形のエッセリヒに比較的似ている。つまり、人体の姿勢、三脚椅子、小座板の形式という点で、ネーデルラント、フランスに比べると、イベリア半島の例がもっともエッセリヒに近いのである。

(3) 「沢山の卵を殻竿で打ったって山のような殻が出るだけだ」(fig.20)

西側上段第7席のミゼリコルディアは「沢山の卵を殻竿で打ったって山のような殻が出るだけだ」という諺の造形化で、逆さまの世界を表す。ブリューゲルの《ネーデルラントの諺》には見られない。短いコートを着用した男が、脱穀の道具である殻竿を持ち、穀物ではなく、団栗のように見える卵を叩いているのである。穀物なら、殻を叩くことで実を出すことができるが、卵では殻を壊し、中身はこぼれる。卵の黄身、白身は、地面にこぼれるだけなのである。その結果は食べられない山のような殻だらけということになる。なん

<sup>39</sup> Block, *Corpus Belgium-the Netherlands*, pp. 44,178, N-15.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p.54, N-09.

<sup>41</sup> Block, *Corpus France*, pp. 155, 396, NH-13.

<sup>42</sup> *Ibid.*, p.120, WS-08.

<sup>43</sup> Block, *Corpus Iberia*, pp.9, 108, SWH-01.

<sup>44</sup> *Ibid.*, pp. 50, 228, NW-05.



(fig.20) ミゼリコルディア「沢山の卵を殻竿で打ったって山のような殻が出るだけだ」

と愚かな行為。無意味な行為を指す諺である。

低ライン地方では、他にも見られる。カルカー、聖ニコライ聖堂ミゼリコルディア(1505-08年頃) (fig.21)<sup>45</sup>では、プリーツスカートを穿いた男が地面にある卵を殻竿で叩きつけている。地面には



(fig.21) カルカー聖ニコライ聖堂ミゼリコルディア「沢山の卵を殻竿で打ったって山のような殻が出るだけだ」



(fig.22) ケムペン聖母聖堂ミゼリコルディア「沢山の卵を殻竿で打ったって山のような殻が出るだけだ」

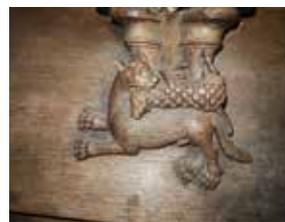


(fig.23) クレーヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂ミゼリコルディア「沢山の卵を殻竿で打ったって山のような殻が出るだけだ」

割れた卵の殻が貝殻のように積み上がっている。ケムペン、聖母聖堂ミゼリコルディア(1493年) (fig.22)<sup>46</sup>でも、丈の短いスカートを穿く男が竿で叩いている。エッセリヒ、カルカー、ケムペンはよく似ているのだが、クレーヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂ミゼリコルディア(1474年) (fig. 23)<sup>47</sup>では、卵がなく、髭面の男が長い杖を振りかぶっているだけである。ブロックはこれも卵の諺だろうと推測しているが、判断は困難である。何れにしても、この諺はこの地域のミゼリコルディアに良く見られるモチーフであり、ネーデルラント、フランス、イベリア半島には見られない。低ライン地方独特の諺なのであろうか。

#### (4) 「口に仔羊を啜える狐」(fig.24)

西側上段4番目には「口に仔羊を啜える狐」のモチーフが表現されている。狐か狼か明白ではないが、ここでは顔の表現から考えて狐と判断するのが適切ではないだろうか。ここで狐は群れから羊を捕まえる行為によって、神学的な寓意としては、キリストの仔羊の群れを餌食とする悪魔を意味すると言われる。だが、はたして神学的な意味をもつかどうかは疑問である。というのは、このモチーフは、ある場合には、羊が鳥になったり、狐が狼になったりするからである。弱肉強食という一般的な意味にすぎないのではなかろうか。



(fig.24) ミゼリコルディア「口に仔羊を啜える狐」



(fig.25) ベルギー、ルーヴェン聖ピーテル聖堂ミゼリコルディア「口に鳥を啜える狐」

低ライン地方、ケムペンの聖母聖堂では、狐が

<sup>45</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, p. 120, SU-09.

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 130, NU-02.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p.38, SU-02.

鳥たちを捕まえようと海中を泳いでいるミゼリコルディアがあるが、このモチーフは第二次大戦で失われたエッセリヒの聖堂にもあったという<sup>48</sup>。ミゼリコルディアでは鳥の方が多いように思われる。

ネーデルラントの類似モチーフは、ルーヴェン、聖ピーテルス聖堂に鳥を啜った狐が見られる（fig.25）<sup>49</sup>。大きな狐が真横で左を向き、口から小さな鳥をぶら下げている。ユトレヒト、聖ヤン聖堂でも狐が鳥を捕まえようと海を泳いでいる<sup>50</sup>。ここではまだ啜ってはならず、3羽の鳥を追いかけて泳いでいるのである。

フランスでは中南部アヴェイロン、ヴィルフランシュ・ド・ルエルグに鳥の獲物を加えた奇妙な動物がミゼリコルディアに表されている<sup>51</sup>。この動物は聖職者風のカラーを首の周りに巻いているが、尻尾はいかにも狐のようである。ただし、狐にしては体が肥満しているのも、雄豚にも、あるいは犬にも見える。ブロックはとりあえず狐に分類している。ここでは、聖職者を装っている点や尻尾の形状からして、狐ととるのが適切なのではないかと思う。

イベリア半島にも1例が見出される<sup>52</sup>。ポルトガル、マデイラのフンシャル大聖堂では狐がすばしこく鳥を啜え、逃げて行こうとしている。後ろ足が飛び跳ね、尻尾が上に跳ね上がり、スピード感十分に表現されている。

しかしこれらの狐が餌を啜るイメージはいずれもエッセリヒ・ミゼリコルディアのそれとは異なり、餌も狐の姿もかなり相違し、互いに密接な関係があるとは思えない。特に複雑な比喻ではないので、このイメージは互いに関係があるとは思えないのである。

#### (5) 四大、空気の寓意像（fig.26）

西側下段第4ミゼリコルディアには女性の立ち姿が見える。彼女は高い円錐形のベール付き帽子を被り、ゆったりとした長めの外衣を身に着けている。左手では腰の辺りで外衣をたくし上げ、右手では八角状の団扇で扇いでいる。団扇の上には雲のような形が浮かんでおり、そこから風を示すような線が斜めに団扇まで降りている。彼女は団扇で自然の四要素、つまり四大の一つである空気を動かしているのである。そして団扇の下には斜めにくねった線が見える。それはおそらく水の流れ、つまり川を表している。この女性は母たる自然の寓意像なのである。



(fig.26) ミゼリコルディア「四大、空気の寓意像」

同様の寓意像は、低ライン地方に他にもいくつか登場する。例えば、ケムベン、聖母聖堂の南上段第5ミゼリコルディア（fig.27）では、同じような格好の女性が左手に持つ円形団扇を川の流れに入れようとしている<sup>53</sup>。彼女の手の上にはやはり雲があり、雲からは雨らしきものがまっすぐ落ちてくる。つまりこの女性＝母たる自然は、四大の水を支配しているのである。

さらにネットルスハイム、聖マルティン聖堂の東側第2ミゼリコルディア（fig.28）では、女性がやはり丸い団扇状のものをもち、それを太陽の方へ向けている<sup>54</sup>。太陽からは熱あるいは火であ

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. 133, SL-01.

<sup>49</sup> Block, *Corpus Belgium-Netherlands*, pp. 35, 160, N-09.

<sup>50</sup> *Ibid.*, pp. 56, 217, N-05.

<sup>51</sup> Block, *Corpus France*, pp. 27, 251, SB-05.

<sup>52</sup> Block, *Corpus Iberia*, pp. 10, 112, NH-08.

<sup>53</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, p. 135, SU-05.

<sup>54</sup> *Ibid.*, pp. 146, 148, E-02.



(fig.27) ケムペン聖母聖堂ミゼリコルディア「四大、水の寓意像」



(fig.28) ネットルスハイム聖マルティン聖堂ミゼリコルディア「四大、火の寓意像」

ろうか、斜めに強烈な線が引かれている。女性の左側には曲線がうねっているが、これもまた水、川を示すものであろう。以上の点からすれば、この女性は四大の火を表す寓意像なのであろう。

これらの女性はほとんど同じ姿で表現され、団扇状のもので、四大の一つを操作している。さらに川が必ず表現され、自然を構成する四大の水を示している。低ライン地方のミゼリコルディアに四大のうちの3つが現存しており、それゆえブロックは、おそらくこれらが、同じ工房、あるいは師弟関係など密接な関係のある工房によって作られたか、共通の手本があったと推定している<sup>55</sup>。

このように女性で母たる自然を表し、団扇を用いて四大の一つを示唆するような寓意像は、ネーデルラントにもフランスにも見られない<sup>56</sup>。

ただ、イベリア半島、トレド大聖堂のミゼリコルディアには「火と水」を両手に持つ男の寓意像がある<sup>57</sup>。椅子に座っている男が両手を肩まであげて右手には火、左手には水を持っているのであるが、水は帽子のようなものを持っているだけであり、水であることがそれほど明瞭ではない。さらに火と水は四大としてよりも、対照的な二つとして表現されているようである。その点から考えると、低ライン地方の四大寓意像と同列に論じるのはいかなものかと思う。

つまり、この四大寓意像は低ライン地方独特の

<sup>55</sup> *Ibid.*, p. 148.

<sup>56</sup> Block, *Corpus Belgium-the Netherlands* や Block, *Corpus France* に全く例は見られない。

<sup>57</sup> Block, *Corpus Iberia*, pp. 50, 230, N-17.

モチーフと言えらるだろう。

## (6) 動物たち

エッセリヒのミゼリコルディアの目立った特徴は、特にはっきりした寓意もなさそうなのに犬のような動物の多彩なポーズが生き生きと表現されていることである。西側下段左から見て行くと、「前足を噛む動物（熊か）」(fig.29)「後ろを振り向く犬」(fig.30)「前足の上に頭を載せる犬」(fig.31)と3つの動物ポーズが続く。これらは頭部から体まではよく似ているが、尻尾を比較すると第一ミゼリコルディアが丸く小さな尾、第二、第三は長く細い尾と異なる。そこから第一が熊、第二、第三が犬と推定されるのである。第一は背を最も丸め、第二は首を背の方へ伸ばし、口を大きく開けて何かに噛み付こうとしている。そして第三はやはり背を丸めながら首を右前方へ伸ばし、前足に頭部を載せている。第一のポーズとのわずかな違いは、第一が右前脚の先の方に口先を乗せているので、噛み付いているように見えることである。その微妙な差を描写している点にこの作家の技量が発揮されているとあって良いだろう。また、いずれも毛並みまで繊細に彫られており、その腕前は見事である。それを19世紀の美術史家パ



(fig.29) ミゼリコルディア「前足を噛む動物」



(fig.30) ミゼリコルディア「後ろを振り向く犬」



(fig.31) ミゼリコルディア「前足の上に頭を載せる犬」

ウル・クレメンは「動物像の機知に富む多様な表現<sup>58</sup>」と呼んだのである。

それ以外の犬のような動物は、下段第七の「右を向くライオン」(fig.32)，上段第一の「尻を舐める犬」(fig.33)，第六の「左へ走る動物(犬)」(fig.34)，第九の「翼をくちばしに咥える鷲」(fig.35)であり，ライオンですらも犬の変形のように華奢な姿である。尻を舐める犬はほぼ円形に体を丸め，左へ走る犬はいかにも速そうな姿である。いずれも柔軟性，俊敏性の点でいかにも犬らしい体を表している。犬や熊の姿は，動物の特徴を実に巧みに表現している点が，際立っている。



(fig.32) ミゼリコルディア  
「右を向くライオン」



(fig.33) ミゼリコルディア  
「尻を舐める犬」



(fig.34) ミゼリコルディア  
「左へ走る動物」

他に下段第五には洗礼者ヨハネを象徴する「旗を持つ仔羊」(fig.36)がある。この仔羊は脚を折って，座っている。球状の模様が身体中にあるが，もちろん羊毛の表現である。この羊毛の表現は「口に仔羊を咥える狐」(fig.24)の場面でも使われている。

いずれにせよ，犬の表現が最もリアルである。いや，リアルさという点で，これほど卓越したミゼリコルディア木彫は珍しいのではないだろうか。



(fig.35) ミゼリコルディア  
「翼をくちばしに咥える鷲」



(fig.36) ミゼリコルディア  
「旗を持つ仔羊」

#### (7) 葉飾り (fig.37)

下段に1つ，上段に4つの葉飾りがある。その配置は何かの意図があるようには見えない。それぞれの葉はほとんど同じ形で，ほんのわずかな差があるだけである。葉飾りは通常内陣席の最も常套的なモチーフの一つで，ミゼリコルディアではそれを仮面モチーフと組み合わせたり，肘掛けになったり，あるいは背板の大きな模様となったり，側板頂部では様々なモチーフを隠す藪のような模様になったり，実に多様な変奏を生み出すのである。



(fig.37) ミゼリコルディア  
「葉飾り」

### 第5章 肘掛けと側板の装飾

最後に肘掛けと側板装飾の興味深い表現を分析しよう。

肘掛け装飾は，ミゼリコルディアと違って着座する人が触れることが多いので，かなり摩耗している。テーマで注目すべきなのは下段の「卵を温めようと籠に入っている僧」，上段の「蜜蜂の巣から蜜を舐める熊」「動物の骨を持つ裸の髭男」「雌鶏を持つ男」「豚の毛を刈る男」「チターを弾くロバ」などで，それらを同地域作品などと比較考察してみよう。

<sup>58</sup> 32頁参照のこと。

「動物の骨を持つ裸の髭男」（fig.38）では、髭男が持つものは多様で、ケムペン、聖母聖堂の肘掛けでは石を持つ裸の髭男として<sup>59</sup>、またシュタインフェルト修道院の肘掛けでは髪と膝を手で持つ裸の人として現れるなど、同種の表現が低ライン地方の肘掛けに現れ、それらはブロックによれば、いずれも神の存在を否定する愚者を表すというのである<sup>60</sup>。



（fig.38）肘掛け「動物の骨を持つ裸の髭男」



（fig.39）肘掛け「豚の毛を刈る男」



（fig.40）P. ブリュエゲル《ネーデルラントの諺》ベルリン国立絵画館、部分

その隣の「豚の毛を刈る男」（fig.39）はP. ブリュエゲル《ネーデルラントの諺》にも登場する諺の造形化である。ブリュエゲルの絵では、中央より左の煉瓦塀の前に二人の動物の毛を刈るモチーフがある（fig.40）。それは「ひとり羊の毛を刈り、もうひとり豚の毛を刈る」という諺である<sup>61</sup>。森洋子によれば、一人は有利で、他は不利になるという意味だという。もちろん羊の毛

を刈る方が有利で、豚の毛を刈るのは不利というわけである。ところが豚の毛を刈る方だけの場合は、短い豚の毛すらも刈る「吝嗇」、あるいはそれすらも刈らねばならない「窮乏」を示すのだという。しかし羊の毛を刈ることと比較すると豚の毛を刈ることが不毛な行為と言えることからすれば、これは「愚行」を示すともいえよう。さらに「動物の骨を持つ裸の髭男」と隣接していることを考えると、ともに「愚行」を示すと推察するのが、適切なのではないだろうか。

このモチーフはやはり低ライン地方の他の聖堂に現れる。例えば、クレーヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂のミゼリコルディアに、短いチュニックを身につけ、帽子を被った愚者として<sup>62</sup>、またシュタインフェルト修道院では毛を刈り終わった豚を抱えている男として登場する<sup>63</sup>。

さらにその隣の「雌鶏を持つ男」（fig.41）は好色家（女たらし）を示す象徴となるだろう<sup>64</sup>。これもまたブリュエゲル《ネーデルラントの諺》に現れる。「豚の毛を刈る男」の背後の塀の先にいる雌鶏に触っている男である（fig.42）。森洋子によれば、妻に小言を言う夫、薄のろ夫、そして好色漢と解されるが<sup>65</sup>、この場合は周辺モチーフとの関連から好色漢がふさわしい解釈だろう。つまり、この3体の肘掛けは連続して破廉恥な悪行を意味するのである。

さて、上段左端の「蜜蜂の巣から蜜を舐める熊」（fig.43）は、クマのプーさんのようなユーモラスな表現である。右手で蜜蜂の巣を抱え、蜂蜜のついた左手を舐めている。同モチーフは、レディンゲン教区聖堂内陣席肘掛け（15世紀末）にもある<sup>66</sup>。

同じくユーモラスなモチーフとして下段にある「卵を温めようと籠に入っている僧」（fig.44）を見てみよう。横に置かれた大きな籠の中に人物

<sup>59</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, p. 137.

<sup>60</sup> *Ibid.*, pp. 162-163.

<sup>61</sup> 森洋子, 前掲書, 221-231頁参照。

<sup>62</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, p. 36.

<sup>63</sup> *Ibid.*, p. 163.

<sup>64</sup> *Ibid.*, p. 110.

<sup>65</sup> 森洋子, 前掲書, 249-258頁。

<sup>66</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, p.155.



(fig.41) 肘掛け「雌鶏を持つ男」



(fig.42) P. ブリュエゲル《ネーデルラントの諺》ベルリン国立絵画館、部分



(fig.43) 肘掛け「蜜蜂の巣から蜜を舐める熊」



(fig.44) 肘掛け「卵を温めようと籠に入っている僧」

しての豚」がリュートを引いている<sup>69</sup>。さらに、カルカー、聖ニコライ聖堂の肘掛けには「バグパイプを吹く豚」がいる<sup>70</sup>。



(fig.45) 肘掛け「チターを弾くロバ」



(fig.46) ケルン大聖堂肘掛け「絃楽器を弾く猿」

が入っているが、それは聖職者だと言う。なぜ籠に潜っているかといえば、卵を孵化させるためなのだ。聖職者が卵を孵化させるなんて、そんな愚かなと思うが、しかも籠の中に入り込むことで孵化させるとは、愚かな行為の極みだろうが、それをこのような聖職者席の肘掛けにつけるとは驚かざるを得ない。

低ライン地方には、そのものズバリではないが、きわめてよく似たモチーフがある。シュタインフェルト修道院の肘掛けに、やはり籠の中に潜り込んだ人物像がある。ブロックによれば、それは「卵を孵化させる愚者」とされる<sup>67</sup>。

上段右端の「チターを弾くロバ」(fig.45)は、他の肘掛けと違って側板でのレリーフだが、やはり肘掛けなどに多く作られた楽器を弾く動物モチーフの一例である。低ライン地方には、次のような例がある。ケルン大聖堂の「音楽家の猿」では、猿が絃楽器を弾いており (fig.46)、他はベルを鳴らしている<sup>68</sup>。またケルン、シュニユットゲン美術館にある内陣席の肘掛けでは「音楽家と

14世紀初頭に作られたドイツ、ミゼリコルディアの傑作であるケルン大聖堂内陣席には多彩な音楽家が登場する。例えば、ミゼリコルディア下部背板装飾、側板などにも、弦楽器を弾いている人や動物、怪物などが登場する。これらは内陣席の性格を考察する上で重要な要素だろう。



(fig.47) 側板頂部「盾型紋章をもつ2羽の鷲」



(fig.48) 側板頂部「餌を捕らえるグリフィン」

側板頂部の立体装飾は、左から「盾型紋章をもつ2羽の鷲」(fig.47)、「餌を捕らえるグリフィン」(fig.48)、「口に咥えて骨を取り合う2匹の犬」(fig.13)、右端に「盾型紋章をもつ2匹の犬」(fig.49)となる。「盾型紋章をもつ2羽の鷲」は、柱、

<sup>67</sup> *Ibid.*, pp. 158, 162, Armrests N-02,

<sup>68</sup> U. Bergmann, *Das Chorgestühl (Meisterwerke des Kölner Domes 3)*, Köln, 1995, p.32.

<sup>69</sup> Block, *Misericords in the Rhineklad.*, p. 96, Armrests 03.

<sup>70</sup> *Ibid.*, p. 121.



(fig.49) 側板頂部「盾型紋章を持つ2匹の犬」

柱に巻きついた綱，柱の上の鶏，梯子が表された紋章を，鷲が片足で抑え，嘴で啣えている。紋章の中はいずれも受難具である。「餌を捕らえるグリフィン」はライオンの強力な足で，餌の動物の両前足を押さえつけ，片方の前足で喉をつかんでいる。鷲のような逞しい翼で屹立し，餌の動物を完全に征服している。グリフィン単独像は様々な地域で見られるが，「餌を捕らえるグリフィン」のモチーフは他に例がない。先に述べたように，「口に啣えて骨を取り合う2匹の犬」はミゼリコルディアとも重複するモチーフだが，こちらは丸彫りなので，前足で立ち上がり，口で強烈に骨を噛み合い，よりダイナミックな表現になっている。「盾型紋章をもつ2匹の犬」では，一方の犬が両前足で紋章を掴み，他方の犬は片方の前足で紋章の下を掴んでいる。紋章の中には，十字架，荊冠，やっこ，金槌が表されている。鷲の紋章内の受難具と合わせて，八つの受難具を示しているのだ。この内陣席装飾で唯一の明瞭な受難シンボルである。

## 第6章 エッセリヒ，聖マルティニ聖堂内陣席装飾の特色

最後にこのエッセリヒ，聖マルティニ聖堂内陣席におけるミゼリコルディア，肘掛け，側板装飾などの特色を簡単にまとめてみよう。

### (1) ミゼリコルディアの仮面（マスク）

ドイツばかりではなく，ミゼリコルディアのモチーフとして目立つのは，大きな顔，つまり仮面（mask）である。ケルン，シュニユットゲン

美術館所蔵の《内陣席》（1298年頃，ヴァッセンベルク，聖ゲオルク聖堂旧蔵）の「狼のような怪物仮面」（fig.50）<sup>71</sup>，あるいは1310年頃のケルン大聖堂の「頭巾を被った仮面」（fig.51）<sup>72</sup>，「ブドウの葉の下の仮面」<sup>73</sup>，「舌を伸ばした怪物の仮面」（fig.52）<sup>74</sup>，ウルム大聖堂の「手で口を開き，舌を出す阿呆の仮面」（fig.53）など，人間ばかりでなく怪物を含む奇怪な仮面像が多数見られる。仮面なきミゼリコルディアはほとんどないくらいなのである。



(fig.50) ミゼリコルディア「狼のような怪物仮面」ケルン、シュニユットゲン美術館



(fig.51) ケルン大聖堂ミゼリコルディア「頭巾を被った仮面」



(fig.52) ケルン大聖堂ミゼリコルディア「舌を伸ばした怪物の仮面」



(fig.53) ウルム大聖堂ミゼリコルディア「手で口を開き、舌を出す阿呆の仮面」

これらは，聖職者が臀部を載せる小座板下に位置するミゼリコルディアに，顔のイメージを置くことで，尻と顔というまったく不適合な要素を意図的に重ね合わせているのである。それゆえにこそ，このモチーフは，かえってミゼリコルディア

<sup>71</sup> *Ibid.*, p. 97. このヴァッセンベルクの内陣席については以下を参照のこと。U. Bergmann, *Schnütgen-Museum. Die Holzskulpturen des Mittelalters (1000-1400)*, Köln, 1989, pp.221-226.

<sup>72</sup> U. Bergmann, *Das Chorgestühl*, p.40.

<sup>73</sup> *Ibid.*, p.41.

<sup>74</sup> *Ibid.*, p.45.

アにふさわしいものになったと言えるだろう。特にケルン大聖堂の「舌を伸ばした怪物の仮面」やウルム大聖堂の「手で口を開き、舌を出す阿呆の仮面」のように舌を出す仮面は、その舌で臀部を舐めるかのようなイメージを喚起するがゆえに、ますますミゼリコルディアに適した奇怪なモチーフになったと言えるのではないだろうか。これこそが聖堂で最も神聖なる空間である内陣の椅子の座面下、あるいは小座板の下という特殊な場所に設置されたイメージにぴったりなのである<sup>75</sup>。逆説的にぴったりなのである。

ところがエッセリヒ、聖マルティニ聖堂の現存する18席のミゼリコルディアには、ただの一つも仮面のイメージがない。18席は原状のミゼリコルディアの半分である。半数は戦災で失われた。失われた半数に仮面ミゼリコルディアが含まれていなかったかどうかははっきりしないが、それでも内陣席片側の半数にまったく見られないということは不自然で、失われた残りの半数にもなかったのではないかと推定することができるように思われる。

では仮面なきミゼリコルディアは、エッセリヒだけであろうか。ここでも低ライン地方の聖堂にその例を探索しよう。まずはクレーヴェ、フランチェスコ会修道院聖堂、カルカー、聖ニコライ聖堂、ネットルスハイム、聖マルティン聖堂、シュタインフェルト修道院聖堂などは仮面ミゼリコルディアがエッセリヒと同様まったくない。さらにケムペン、聖母教区聖堂では、しかめ面の仮面がただ一つあるのみであり、他の21席は別のモチーフである。

とすると、仮面なきミゼリコルディアは、低ライン地方に存在する聖堂の際立った特徴と言えるかもしれない。

## (2) 聖書テーマ

マクデブルク大聖堂内陣席のように、側板には「受胎告知」から「キリスト昇天」までの26場面や旧約物語、あるいは諸聖人像などがあり、側板頂上装飾には旧約預言者像、十二使徒像、教父像などがあるのが普通である。他にも聖堂内陣席には聖書場面や教義に関連するイメージが表されることが多い<sup>76</sup>。

では、エッセリヒの聖マルティニ聖堂ではどうだろう。ミゼリコルディアにある聖書的モチーフは洗礼者ヨハネを象徴する「旗を持つ仔羊」のみである。また下段側板の外側にはもともと聖アウグスティヌス、聖アムプロシウス、聖ヒエロニムス、聖グレゴリウスという四大教父のレリーフがあった。現存するのは聖アウグスティヌスと聖グレゴリウスだけで、他の2つは失われている。さらに側板頂上装飾の二つの紋章の中には、受難具モチーフがある。他には聖書など教義に関連するモチーフはほとんど見られない。つまり、この内陣席装飾には、明白な聖書テーマがきわめて少ないのである。ミゼリコルディアだけならその理由は分かりやすい。ミゼリコルディアは聖職者席の座板下に彫られたイメージなのだから、普段はほとんど目に入ることがない。いわば逆の意味で「聖域」のごとき場所ゆえに、教義から外れていることも許容されるかもしれない。ところがこのエッセリヒの聖堂には、ミゼリコルディアだけでなく、普段目につきやすい側板、その頂部、肘掛けなどにもほとんど聖なる画像がないのである。

## (3) 側板の旧約預言者像と福音書記者像

普通、とりわけ側板頂部には、旧約聖書の預言者像や福音書記者像が表されることが多い。例えば、ライン中流域の小都市ポッパールト、旧カルメル会修道院聖堂内陣席（1460-70年頃）の一例、

<sup>75</sup> 聖堂内の仮面モチーフについては、以下を参照のこと。マイケル・カミール『周縁のイメージ 中世美術の境界領域』永澤峻・田中久美子訳、ありな書房、1999年、104-107頁；金沢百枝『ロマネスク美術革命』新潮選書、2015年、19-31頁。

<sup>76</sup> H. Michael, *Das Chorgestühl im Magdeburger Dom*, Norderstedt, 2002, pp.18-103; G. Porstmann, *Das Chorgestühl des Magdeburger Domes*, Berlin, 1997, pp.65-97.

北東端下段には銘帯を持っている二人が跪いているが、その銘帯には Isaias VII. 14. や Daniel IX. 25. と記されていることから旧約預言者のイザヤとダニエルであることがわかる (fig.54)<sup>77</sup>。この頂部は近代の修復による像だが、原状を反映したものと推測される。一つの銘帯は『イザヤ書』第7章14節を指し、「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み その名をインマヌエルと呼ぶ」という引用を内包する。つまりイエス誕生の預言を示しているのである。『ダニエル書』(IX, 25) も同様に救世主の到来を預言している。他にも北側下段には有髭の人物が多い。彼らもおそらく旧約預言者であろう。



(fig.54) ボッパールト旧カルメル会修道院聖堂側板頂部「イザヤとダニエル」

他に低ライン地方では、ケルン、聖アンドレアス聖堂にやはり銘帯を持つ二人の有髭人物が側板頂部に何体も置かれている<sup>78</sup>。ウルム大聖堂内陣席頂部の有名な古代の偉人たち、巫女たちの像にしても<sup>79</sup>、旧約預言者像を発展させた姿であろう。

なお、ボッパールト旧カルメル会修道院聖堂の内陣席上段の側板には、北側に福音書記者マタイ

とヨハネ、南側にルカとマルコがおり、福音書記者とキリスト誕生を予言する旧約預言者が勢ぞろいするという典型的な聖堂装飾となっている。

このように多くの聖堂の内陣席側板頂部では、旧約や新約聖書の主要な人物の登場が常道なのである。

ところがエッメリヒ、聖マルティニ聖堂の内陣席には、これらのようなあまりにも当然な人物たちの姿がまったく見られない。同じ低ライン地方のミゼリコルディアが現存している聖堂にも、この聖堂のような例はまったく見られない。とすると、これはこの聖堂に独特の特徴ということになりそうである。

### 終わりに

さてこのようにエッメリヒ聖マルティニ聖堂内陣席の特徴を分析すると、きわめてユニークであることが分かる。

さらに小座板の形式と内陣席装飾のテーマ13種、つまり計14の要素を他の聖堂と比較すると、現存作例に関する限り、4要素以上で共通するのは、7要素で共通するケムペン、聖母聖堂のほか、4要素のクレーヴェ、聖フランチェスコ修道院聖堂、カルカー、聖ニコライ聖堂、シュタインフェルト修道院聖堂と、P.ブリューゲルの《ネーデルラントの諺》だけである。つまりブリューゲルの絵を除くと、すべて低ライン地方の聖堂ということになる。

そのうち肘掛けで共通する要素が多いシュタインフェルト修道院を除くと他の内陣席ではすべて二葉形小座板の聖堂なのである。

また、ミゼリコルディアテーマで共通要素が多いのは圧倒的にケムペン、聖母聖堂である。

このようにして考えると、エッメリヒ、聖マルティニ聖堂の内陣席が主に低ライン地方で活躍した作家により制作されたと推測できる。つまり、先述したように、彫刻家アルント、ヘンリク・ベルント親子などがその候補としてあげられるが、とりわけケムペン、聖母聖堂の作者であるヨハネ

<sup>77</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, p.14; *Karmeliterkirche und ehem. Kloster Boppard*, Regensburg, 2005, pp. 8-10.

<sup>78</sup> Block, *Misericords in the Rhineland*, pp. 93-95; *Dominikanerkirche St. Andreas Köln*, Regensburg, 2013, pp. 28-29.

<sup>79</sup> W. Vöge, *Jörg Syrlin der Ältere und seine Bilderwerk*, Berlin, 1930; D. Gropp, *Das Ulmer Chorgestühl und Jörg Syrlin der Ältere*, Berlin, 1999.

ス・グルーターに近い親方が最も有力な候補者になるだろう。

[図版出典]

fig.2 G. Dehio, *Handbuch der deutschen Kunstdenkmäler, Nordrhein-Westfalen I*, p.346.

fig.3 *Emmerich St. Martini*, p.2.

fig.7, 8, 15, 19 Block, *Corpus Iberia*, pp.120, 191, 120, 228.

fig.9, 18, 25 Block, *Corpus Belgium-Netherlands*, pp.217, 178, 160.

fig.10, 21, 22, 23, 27, 28 Block, *Misericords in the Rhineland*, pp.32, 120, 130, 38, 135, 146.

fig.12, 17, 40, 42 L. Silver, *Pieter Bruegel*, New York-London, 2011, pp. 224, 222, 222, 222.

fig.14 Block, *Corpus France*, p.257.

fig.46, 51, 52 U. Bergmann, *Das Chorgestühl*, p.32, 40, 41.

それ以外の図版は筆者の撮影による。

## Unique Misericords in the Choir Stalls of St Martin in Emmerich

MOTOKI Koichi

(Professor Emeritus)

Emmerich is the last harbor of the Rhine in Germany. St Martin is located along the Rhine in Emmerich. The choir stalls of the church are remarked to be the most wonderful in the Lower Rhine region. We are going to analyse the characters of the choir stalls.

### (1) The History of St Martin and the Donor of the Choir Stalls

The Church of St Martin was built in ca.1040 by Bishop Bernold of Utrecht. The church was badly damaged in 1237 to 1238 by a flood from the Rhine. In ca. 1485 the church was reconstructed by Moritz von Spiegelberg, who was the dean at the chapter of St Martin. Then he donated the choir stalls of the church.

On 7 October 1944 the church was destroyed by air attacks, and the south part of the choir stalls were demolished, but the north part survived.

### (2) The Character of the Misericords

Generally masks are used as themes of misericords, such as at the Cathedral of Cologne and at the Ulmer Cathedral. However, there is no mask in the misericords of St Martin at Emmerich, such as in the churches in the Lower Rhine region, Minoriten Church at Cleves, St Nicholas at Kalkar, and St Martin at Nettersheim.

### (3) Statues of Prophets and Evangelists on the End Panels

On the top of the end panels in the choir of the Carmelite Church of St Severus at Boppard along the Middle Rhine, there are statues of two prophets, Isaiah and Daniel. Generally statues of prophets and evangelists stand on the end panels of choir, but we cannot see any statues of prophets or evangelists in the choir in St Martin at Emmerich.

Eventually we can conclude that the choir of St Martin at Emmerich is very unique.